

猫という灯り (1) 犬の話から始めてみる

いつか猫を飼いたいと、かれこれ 30 年ほど望んでいた。犬や猫に囲まれて暮らしていた実家を出てからの年月だ。それほど猫が好きなら自分でさっさと飼えばいいようなものだが、気に入って住む物件がいつも、ペット飼育不可だったのである。さらに、旅行や仕事で家を長期間空けることが多いのも、躊躇するに十分な理由となっていた。そうやって「365 日きちんと世話をできる状況にない」ことを言い訳にしつつ、ペット飼育可の住居に移る選択肢をとらずにいたが、振り返ってみれば要するに、「命を引き受けて、その生涯を全うさせる自信が無かった」のだろうと思う。生きものの命という、この世にたったひとつしかない、かけがえのない尊いものをこの手に委ねられるには、私はあまりに未熟過ぎた。

そして時が過ぎ、無為に年を重ね、未熟であることへの羞恥心すら無くした挙句の 1 年前の夏、とうとう猫との暮らしが始まった。ネットの「猫の里親募集」サイトで見つけた雌の黒猫、当時 2 歳。仔猫から飼うのと違って、すでに成猫である彼女との暮らしは最初から穏やかである。だが、穏やかとはいえ、さざ波くらいは立つし、大笑いするような出来事もそこそこある。そして、そういう日常の小さなことをいつか私は忘れてしまうのだろう。だから、その前に書き留めておきたいのだが、先に記憶から零れ落ちていくのは、実家で飼っていた犬や猫のことだと思い至った。そのため、私にとって初めての飼い犬のことから始めてみる。

私をはじめて身近に暮らした動物は、雑種の雄犬だった。ある人が叔母を介して、貰ってくれと私の実家に無理に頼んできたらしかった。私は小学 3 年生だった。その頃の両親は、朝から深夜まで働いているような状態だったから、犬を飼うことに難色を示したものの、半ば強引に連れてこられてしまい、仕方

なく飼い始めたものだったとは、後年に聞いた話である。その犬は、茶色の毛並みに少し黒が混ざっていて、柴犬くらいの大きさに育った。鼻のまわりと眼は黒く、気は良くて優しいけれど、賢いというには程遠かった。オヤツに貰った餌を、庭のどこかに埋めてそのまま忘れるのはしょっちゅうだったし、脱走に関しては常習犯だった。

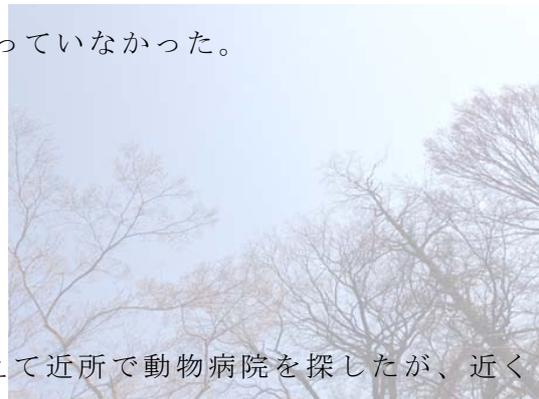
いまは、犬を毎日散歩させるのが常識だし、適当な時期に去勢手術をするとか、餌のカロリーやその安全性といった、ペット飼育のための様々な情報が手に入りやすい。だが当時は、正しい飼育方法を知ることなど、おそらく一般的に重視されておらず、多くの家は昔からの飼い方を踏襲していたように思う。

「味噌汁かけご飯に削り節」が毎日のメインディッシュだった猫もかなりの数にのぼるのではなかろうか。日本で最初のドッグフード『ビタワン』はすでに発売されていたが、キャットフード発売にはまだ更に年月を要する、そんな時代のことである。だから我家も、動物を人間の生活に合わせることに特段の注意を払いはしなかった。

父は物書きだったが、大学で教鞭をとっていたし、講演会など外での仕事もかなりあって、日中は出かけていることが多かった。そのため、帰宅後、深夜から明け方にかけても原稿を書くことが常で、母もそれを手伝っていたから、お手伝いさんに起こされて兄や私が登校していく時間は、父も母もたいてい寝入りばな、という具合だった。両親には、「暇な時間」はもとより「ゆったりした時間」すら皆無だったと思う。だから、その中で毎日犬を散歩に連れて行く時間の余裕はなかった。たまに私が連れていくことがあったが、何しろ、お手とお坐り以外の躰はひとつも出来ていない。首輪にリードをつけて庭から外に出ると、犬は私に構わず自分の行きたい方向へ走らんばかりに進もうとする。慌ててリードを引っ張りブレーキをかけても突き進むから、犬の首には首輪が喰いこみ、ゼエゼエハアハア荒い息が響く。まるで虐待しているかのような、

見られたものではない恥ずかしい光景を毎度繰り広げることになるから、結果、散歩の回数は減るという悪循環だった。

ただ、なかなか散歩に連れて行けないことは家の者も可哀そうに思っていた。そのため、庭の隅から対角の端まで人間の肩くらいの高さにロープを張り、そこに犬を長い鎖で繋いで、庭のほとんどの面積を彼が自由に歩けるようにしておいた。しかし、それに飽き足らず頻繁に「縄抜け」し、柵の隙間から脱走するのである。今思えば、早いうちに去勢手術をすれば良かったのだ。だが、当時の我家は、そんな知識さえまともに持っていなかった。



犬が家に来たとき、母はのちのちを考えて近所で動物病院を探したが、近くにはなかった。やっと見つけた獣医師は、バスなら 20 分はかかる駅の、そのまた向こうの地域に住む人で、当時すでに「おじいさん」といっていい年齢だった。もともとは軍馬の専門医だったという。おそらく戦前から戦中にかけての時期がそのキャリアの盛りだっただろう。時代の変遷に促され、犬や猫を診ることになっていったと想像する。病院施設は持たず、医療用具を自転車の前かごに入れ、我家のような、一時間はかかる道のりでも、飄々と往診に通ってこられた。話は戻るが、適切な時期に去勢手術をするという知識を欠いていた我家に、その獣医師からも、去勢という提案はなかったらしい。それほどに当時は、現在のペット飼育状況と隔たりがあった。

斯かるゆえに哀れな犬は、抗うことの出来ない身の内からの衝動にかられ、自らの行動を縛っている首輪から抜けようと、もがいてもがいて、やっとのことで自由を獲得する、という荒業をしょっちゅう繰り返していたのである。私は、学校から帰宅した途端の「また逃げたのよ」という母の言葉に、踵を返して捜しに行ったことが一度や二度ではなかった。

当時住んでいた家は、深大寺という古刹と、都立神代植物公園の両方にほど近かった。小学校への通学路でもあった参道には蕎麦屋さんが軒を連ね、あんず飴や綿菓子、お面を売る露店もあったが、いつも人通りは少なく、時間がゆっくり動いていた。今は観光地のようなのだが、当時、界限が賑わったのは、年末年始と3月のだるま市、夏の盆踊り程度の記憶しか無い。

家から参道への道を途中で左に曲がると、深大寺の裏山に至る坂道に出る。おそらく、「脱走」したうちの犬が駆けまわっていた辺りだろう。墓地を右に、植物園の高い塀を左に見ながら登った先には3軒ほど蕎麦屋さんが並んでいて、その向かい側は植物園の裏門である。坂道の途中には背の高い古木が並び、竹や笹、薄などが鬱蒼と生い茂っていて、陽が高い時間でさえ、どこか薄暗く怖い印象もあった。夏休みになると、学校の友達と小銭を握りしめて坂道を登り、蕎麦屋さんの店先にある冷蔵庫からラムネを買ったことが、草いきれとともに、幻のように思い起こされる。

その道沿いに、とても広い敷地の大工さんのお宅があった。母屋が我家と庭を隔てて背中合わせに位置していて、スピッツらしき白い犬を飼っていた。低い生垣に囲まれた広い作業場は道からほぼ丸見えだったから、その前を通る度にしばらく立ち止まっては、鉋がけをするご主人の、シューッ、シューッと音をたてて前後に動く、その規則正しい身体運動を眺めるのが好きだった。

ある日、犬の散歩に行ったときのことである。いつもの如く、ぐいぐいとリードを引っ張るようにして坂道のほうへ行きたがるので、仕方なく私も引きずられるようについて行った。すると、件の大工さんの作業場へ入っていかうとするのだ。慌ててリードを引っ張るも、憑かれたように突き進む雄犬の力に小学生が敵うわけもない。抗いながらもズルズルと靴の踵は地面をこすり、とうとう敷地内に入り込んでしまった。物音を聞きつけたご主人が作業台の裏から現われ、訝しげに私たちを睨め付けた。すると次の瞬間、彼は「あ！この野郎！！」と怒鳴りながら、うちの犬に向かって拳をふりあげ殴りかかってきた

のだ。わけが分からず、反射的に犬を引っ張り道路へ走り出す——さすがに犬もこの時は尻尾を巻いて私と一緒に逃げた——と、私の背中にご主人の「うちの犬に子供産ませやがって、ちくしょう！」という怒声がふりかかってきた。犬は、大工さんの作業場ではなく、白い雌犬めがけて突き進んでいたのである。もはや散歩どころではない。ほうほうの体で逃げ帰った。

後日、おそろおそろ、大工さんの作業場の前を身をかがめて通り越し、塀越しに犬小屋を覗ける場所まで行ってみた。大きな八つ手の木陰にある犬小屋の前に、白い犬が寝そべっている。果たして、その周りには茶色い毛をした仔犬が数匹、ときに母犬にぶつかりながら、よちよちと歩いていた。揃いも揃って父親似の仔犬なのだった。

のちに、そこのご主人と母が偶然会った折には、笑って仔犬とその父親について触れられたそうだから、時を経て、我家のあまりの非礼を赦して下さったのかもしれない。

犬が9歳のときに我家は転居した。そして、半年も経たないある日、彼のためのドッグフードを買いに行った母が、そこで仔猫を「衝動買い」することになる。だが、窓ガラスの内側に増えた新参者に犬は特に構いもせず、たまに短時間の脱走をしたりと、あくまでも自分のスタイルを貫いていた。それでもいつしか老いは忍び寄るもので、13歳の春から数ヶ月病んだのち、ある朝早く、ひっそりと庭の隅で逝ってしまった。

その昔の、私を体ごと引っ張っていく彼のとんでもない散歩スタイルと、それを咎められ、困ったように見つめ返す円く黒い瞳を、いま思い出す。

